

自分が劣勢に回っていることに、アーサーは早い段階で気付いていた。

《シユタイン》がいれば《ジャック・ザ・ナイトメア》の一人一人は脅威ではない。だが、その連携が手強かった。ジャックが率いる秘密部隊の隊員たちは、全員でひとつの生物であるかのように有機的に動いた。同じ身体能力を持った者たちが、同じことを考えながら、同時に動いているかのようなのだ。恐ろしく息が合っている。

まるでー

「……みんな同一人物みたいだな。なるほど……」

徐々に窮地に追いやられつつも、アーサーは目をぎらつかせて仮面の隊員たちを注視する。一瞬たりとも目を離さない。

「年寄りもいれば、女性もいる……コナンが言った通りだ……なのに、この練度。この統一感。けど、ターナさんは基本的にターナさんだった。非常時だけこうなるのか？ それとも、コントロールができる？ 違う。それならもつと他にやりようがあつたはず。やはり万能なんかじゃない。あくまで、特定の『機能』があるだけだ……！」

《シユタイン》の背中にしがみ付きながら、アーサーは集中し、没頭する。頭脳を高速で回転させる。

背後に回った一人が、槍を突き出した。アーサーは《シユタイン》を操作して、切っ先を躲す。

左右の二人が、ナイフを斬り付けてきた。同時に、正面の一人が、銃を発砲する。

ガンツ、と操縦席の鉄枠に弾丸が着弾し、跳弾した。無視して、日本刀で右の一人を牽制。

左の一人の斬撃は、《シユタイン》の左腕をかざして防御する。

すでに《シユタイン》の全身には、幾つもの切り傷が刻まれていた。左腕に新しい傷が刻まれーすかさず日本刀で斬り付けたが、隊員は後退して攻撃から逃れる。

もう無我夢中だった。《ジャック・ザ・ナイトメア》たちの共通点を推測しながら、その攻撃にほとんど反射神経だけで、なんとか対応し続ける。

「……ジャックの《ギアス》……見えて来たぞ。双方向性はない。あるなら、こういう配置にはならない。それに数……無制限なはずはない。いや、それより条件か？ 《ギアス》を掛けるための条件……《ギアス》が掛かるための条件……前者なら……《ギアス》を掛けるジャック側に条件があるだけなら、時間をかけて条件を満たせばいいだけだ。奴の《ギアス》は、もつと広範囲に及んでいたはず……しかし後者なら、《ギアス》を掛ける対象に条件があるなら……」

…つまり、少なくとも、《解放者》なら……」

無から何かを作り上げるかのように、アーサーは自らの推理を脳内で練り上げていく。溢れる思考が言葉になって、勝手に口からもれていく。

しかし、その思考は強制的に停止させられた。

ピューイツ！

突然、ロンドン塔に笛の音が響き渡った。

《シユタイン》を相手取っていた《ジャック・ザ・ナイトメア》たちが、一斉に動きを止める。次いで、アーサーを捨て置き、包囲網を解いて走り出した。

ホワイト・タワーへ。

「……な、なんだ？ どうした？」

唾然とつぶやくアーサーの前で、《ジャック・ザ・ナイトメア》たちは次々にホワイト・タワーの中へ飛び込んで行った。アーサーは当惑して操縦席から腰を上げる。

「いまの笛のせいかな？ 何かの合図？ 撤収して……いや、そうじゃない。これは……守りを固めた？」

アーサーは自分でつぶやいた結論にハツとした。《ジャック・ザ・ナイトメア》たちが守りを固める相手はひとつしかない。モリアーティたちが現れたのだ。

「もう来たのかつ。不味いぞ。いよいよ収集が付かなくー」

コッー

と小さな落下音が聞こえた。何かが一瞬小さな物が、地面に落ちる音。アーサーが反射的に目を向ける。すると、ホワイト・タワーの側に、ビーコンの発信器が落ちていた。

アーサーは両目を見開き、ホワイト・タワーを見上げる。

「コナン！ やはりここにー」

「おおいつ、アーサー！」

突然名前を呼ばれ、アーサーは慌てて首を巡らせた。

「なっ、警部！ 何してるんだ？」

礼拝堂の方から、クラウドが駆け寄って来ていた。だが、彼の役目はコナンの救出。こんな

風に姿を見せていいわけがない。

混乱するアーサーに、クラウスは告げる。

「コナンがいるのは、予想通りホワイト・タワーだ！ だからー」

「わかっている！ だが、《シユタイン》の全高では、中には入れない！」

城塞として建築されただけあって、ホワイト・タワー内の廊下はかなり狭かったはずだ。《シユタイン》は使えない。かといって、アーサーが生身で突入したところで、《ジャック・ザ・ナイトメア》の餌食になるだけだ。

しかし、

「屋上だ。モリアーティ側の狙撃手が狙っている」

そう言つて、焦りを浮かべるアーサーに、クラウスは抱えてきた《Eロール》を突きつける。

クラウスが言わんとすることを、アーサーは理解した。彼の頭脳が独りでに、手渡された《Eロール》の耐荷重を計算し始めた。

*

「久しぶりだね。確か三年ぶりになるはずだが、あれから進歩が見られないのは頂けないな。策を巡らせながら、脇が甘いのも変わってない。いきなりがっかりさせないで欲しいものだ」
モリアーティの口振りや態度は、夜の散歩に出て、古い知人と再会したかのようだった。こんなときだというのに、リラックスして見える。

ただ、その表情は冴え冴えと冷たい。モリアーティを中心に、周囲の空気が張り詰めていた。

コナンはモリアーティを凝視した。間違いない。メリーウェザーの屋敷で垣間見た、あの男だ。そしてまた、コナンの記憶にある顔でもあった。

再び相見えた兄の仇に、身体のコブが熱くなる。

他方、ジャックが鼻を鳴らし、肩を竦めた。

「……さすがの神出鬼没ですね。どうやって、ここに登って来たのです？」

「それぐらいは自ら知恵を巡らせたまえ。ああ、そうだ。そこにあつたクロスボウは処分したよ？ ロープを張って脱出するつもりだったようだがーとすると、切り札は、誘き寄せて味方ごと爆破と言つたところだろう。このホワイト・タワーは歴史的建築物だ。君のくだらない都合で毀損しようなどと度し難い」

「……相変わらずよく回る舌です」

ジャックはもう一度、おどけるように肩を竦める。

しかし、コナンは聞き捨てならない。

「爆破だと？ どういうことだ！」

「単なる保険ですよ」

「貴様……！」

屋上に上がる途中で見た、階段に置かれていた樽。あれは油などではなく、爆弾だったのだろう。

やはりジャックは、徹頭徹尾モリアーティを殺すことしか考えていない。彼の発言は何ひとつ信用してはならないのだ。

そして、必死に憤りに堪えていると、自分に向けられたモリアーティの視線に気がついた。モリアーティと視線が合う。彼の唇に、わずかな微笑が過った。

「……コナン・ワトソン。先日は突然理由も告げずに依頼を取り下げて申し訳なかったね」

アイリーンの件だ。そう言えば、彼は彼女でもあった。アーサーから説明はされていたが、いまこうして改めて見ても、モリアーティがああ黒いドレスの依頼人と同一人物とは信じられない思いだ。

だが、いまコナンの脳裏を占めるのは、黒いドレスに身を包んだアイリーンではない。

兄が死んだ「現場」にいた、目の前の男の顔だ。

「……《教授プロフェッサー》モリアーティ。貴方に、聞きたいことがある」

何かに突き動かされるように、コナンは勝手に口を開けていた。もう、ジャックの存在すら意識の外だ。ドクドクと流れる脈動が、耳の奥を塞がらんばかりだった。

優しかった兄の記憶が甦る。

兄に与えられた、救いと過去。いまに繋がる掛け替えない想いが、コナンの中で膨れあがつて破裂する。

「俺の兄を殺したのは、貴方なのか、モリアーティ？ 貴方が殺したのか？ ジェームズ・ワトソンを？」

その問いかけに、モリアーティは大きく目を見開いた。

それから、満面に滴るような笑みを浮かべ、真っ直ぐにコナンを見返して肯定した。

「そうだ。私が――モリアーティがジェームズ・ワトソンを殺した。相違ない」

「何故だっ！」

「そのときが来たからだ。彼は始めから死ぬ定めだった」

「ふざけるな！」

コナンは激昂して唾を飛ばす。怒りの余り、目の前が暗くなった。

「兄が《ジャック》の一人だったからか？　ならなぜ、俺のために、こんな場所にこのこと顔を出した！」

「……君のためだけではない。私は、過去の因縁を断ち切るためにここに来た。実際、《嚮団》には心の底から、うんざりさせられているからな。特に君だ、ジャック」

モリアーティの浮かべる笑みが、酷薄な氷の冷笑に変わった。

対するジャックもまた、獲物を前にした肉食獣のような笑みで応じる。

「過去の因縁を断ち切る？　それこそ、まさにこちらの台詞ですよ。薄汚い裏切り者。忌むべき《嚮団》の恥部め」

相手を呪うように、ジャックは吐き捨てる。その眼光は禍々しく、全身に危険な力が満ちている。

「いまの貴様は、病に冒された野良犬だ。狂気に落ちたペテン師だ。せめてその首を掻き切り、C・C様に捧げて、我が忠節を示すのみ！」

「救いがたいな、ジャック。まだ『あの女』にイカレてるのか？　彼女は、君はもちろん、他の誰にも興味などない。当然、私にもな。暗殺指令など、とうに忘れてるだろうさ」

「知った風な口を叩くなあ！」

突然、ジャックがナイフを取り出し、モリアーティに斬りかかった。コナンでは反応できない、目を瞠る俊敏さだった。

だが、モリアーティは懐から短剣を抜き放ち、ジャックの斬撃を剣身で受け止めた。

さらに二度、三度とジャックとモリアーティが斬り結ぶ。ジャックは凄まじい速さ。対するモリアーティは、まったく無駄のない動きで応戦する。キンツ、カツ、キンツ、と高く澄んだ金属音が、連続して夜気に弾けた。

二人とも手練れだ。秘密部隊を率いるジャックはともかく、モリアーティも相当の腕前である。ガキッ、と二人はナイフと短剣を切り結び、そのまま鏝迫り合いになった。

至近距離から交錯する両者の視線。仮にいま《ギアス》を掛け合えば、二人はどうなるのだろうか。

「シナリオと違うんじゃないかね、ジャック？　臆病者の君には、らしくない振る舞いだ」

「いいや、シナリオ通りだよ、モリーティ！　さあ、コナン！　やっとな番だ。目を覚ませ！」

モリアーティの短剣に自身のナイフを押しつけながら、ジャックは大声で叫んだ。その瞬間、コナンの奥底から――彼の意識の深みから、脳髄に潜んでいた、真つ黒な塊が浮上した。

そいつは、たちまちコナンの自我を意識の端へと追いやり、自らが替わりに居座った。コナンの意識を占拠し、コナンの肉体を――その支配権を奪取する。

「……ええ、わかりました」

コナンが言った。

しかし、コナンではない。

コナン・ワトソンの身体が発した声だったが、それは、コナン・ワトソンの言葉ではなかった。

「概ね想定していた状況のようです。ならば、想定通りに行動しましょう」

そう言って、コナンは「コナンの身体は、うっすらと笑った。

コナンは愕然とする。

自分の中に、別の人格が巣くっている。そいつが、自分の肉体を乗っ取っている。その、痛烈な違和感。

しかし、恐ろしいのは、その違和感が見る見る内に消え去って行くことだ。

まるで、誰かに強要されるかのように、「これが常態だ」と感じつつある。自分の中の別人格を受け容れようとしている。

「約束通り、お教えしましょう。それが私の《ギアス》です」

そう言うと、ジャックはモリアーティの短剣をナイフで弾き、大きく後方に飛び退った。

「私は、私の人格を他者に複写することができる！ 他人に自分の分身を混ぜることができるのですよ。これこそが、私がC・C様から授かった神秘の技！」

「……………」

短剣を構えるモリアーティが、冷めた視線をコナンに向ける。対するコナンは、彼自身の意志に反し、ニタリとした笑みを浮かべた。そして、ジャックが投げ寄越した予備のナイフを、慣れた手つきで器用に受け取った。

「さあ、どうします、モリアーティ？ コナン・ワトソンは、我が手の内だ」

「……下らない。彼に私を殺させるつもりかね？ 私が抵抗しないとでも？」

「殺させる、か。無論それも考えたが、案の定貴方の想定内のようだ。せっかくですからね。少し、趣向を凝らして見ましたよ？」

ジャックがそう言った直後、コナンの身体が受け取ったナイフの切っ先を、己の首筋に当たった。

モリアーティの顔色が変わる。ジャックは歯を剥き出しにして笑い、再びモリアーティに斬りかかった。

「もうおわかりでしょう、モリアーティ？ もし貴方が『気に食わない』動きをすれば、ただ

ちに彼は自分の首を掻き切ります。そのことを肝に銘じて、その短剣を振るいなさい！」

ジャックが躍り上がってナイフを突きつける。

その斬撃を、モリアーティが短剣で払う。

「……愚かな男とはわかっていたが、ずいぶんと惨めな男になったな」

感情の削ぎ落とされた顔で、モリアーティが両腕をだらりと垂らした。その無防備な姿に、ジャックは満面に嘲笑を浮かべる。

「死ねっ！」

ジャックのナイフが閃いた。自らの首筋にナイフを当てつつ、コナンはその光景に息を呑む。銃声が跳ねたのは、そのときだった。

ターンツ、と鋭い打撃音のような銃声だった。着弾したのは、駆け寄るジャックの足下だ。

ジャックは反射的に背後へと跳ね戻った。

「狙撃」 モリアーティっ、貴様！」

銃による遠距離からの狙撃だ。銃声、それに跳弾した方向からして、北側からの狙撃。中庭を挟んでホワイト・タワーの北側に位置する、ウォータールー兵舎からだろう。

ホワイト・タワーの屋上には、身を遮るような物は何もない。唯一胸壁ぐらいだが、胸壁に張り付いては勝ち目はない。

「見張りとしてサポート要員を置いていたようだが……狙撃ポイントになるーつまり、敵に奪取される可能性は考慮しなかったのかね？ だから脇が甘いと言ったんだ」

「クツ」 コナン！」

ジャックの呼びかけに応じ、コナンの腕が動いてナイフを持つ手を見せつけるように持ち上げる。切っ先が皮膚を裂き、だらりと血が首筋を這った。

狙撃を中止せねば殺すという警告だ。コナンは歯噛みするが、どうにもできない。いまの自分分は、完全にジャックの「駒」と化していた。

「モリアーティ！ すぐに狙撃を中止させろ！」

「生憎だが、君の兵隊とは違うんでね。私の同志は、私が止めると命じて、『必要とあらば』自らの判断で引き金を引くだろう。もつとも、いまの狙撃は大佐ではなさそうだが……」

最後は小声だったため聞き取れなかったが、モリアーティがジャックの要求を拒否したのは確かだった。

必要とあらば。なら、狙撃手がそう判断すれば、次の瞬間にも頭を打ち抜かれるかもしれないということだ。

「チイツ！」

ジャックは舌打ちしてコナンに駆け寄ると、彼の身体を盾にして狙撃に備えた。コナンの身

体も勝手に動き、右手はナイフを首に当てたまま、左手を広げてジャックを庇う。

直後に、銃声と共に屋上で跳弾の火花が飛んだ。ジャックを庇うコナンを掠めるような銃撃だった。

「モリアーティ！」

「無駄だよ。それに、言ったはずだ。私は、過去の因縁を断ち切るために、ここに来ている」

モリアーティは平然と答えた。

ジャックが歯噛みしながら、指笛を鳴らした。おそらく、階下にいる《ジャック・ザ・ナイトメア》たちへの応援要請だ。

そして、コナンの中のジャックも歯ざしりする。コナンの腕が動き、さらにナイフの切っ先を埋めた。首からの流血がシャツの襟を赤く染めた。

コナンの中のジャックは、痛覚を遮断しているらしかった。さらに言えば、擬似的な人格の複製とはいえ、死に対する恐怖もない。これまでに見た足音を殺す歩法と言い、《ギアス》で混ぜられたジャックの人格は、対象の肉体を機械の如く操れるらしい。

自分はこのまま死ぬのだろうか。何ひとつ為せないまま。

絶望がコナンを締め付ける。

すると、

「コナン・ワトソン」

モリアーティが話しかけた。彼の瞳は、真っ直ぐにコナンを――彼を操るジャックではなく、封じられたコナンを見つめているように思えた。

「己の欲望を解放したまえ。君は――」

そのときだ。

それは、突然やって来た。

ガガガガガーツ！

石を削るような異様な音が、西側の胸壁から聞こえてきた。反射的に向かった視線の先。胸壁を一気に乗り越え、河面から跳ねる魚のように屋上に跳び上がって来た物があった。

二つの車輪に凶悪な鉤爪を備えた、フットボールのボールほどの大きさの機械。

機械は、胸壁を飛び越えて屋上に飛び込んだのち、自らに結びつくロープを引かれて、ガキッ、と胸壁に食い込んだ。そして、自身を胸壁に固定したあとは、中心の軸を高速で猛回転させ始めた。

軸が回るにつれ、繋がるロープが巻き取られていく。機械は負荷に悲鳴を上げたが、同時に、

ガシヤツ、ガシヤツ、と騒がしくも軽快な音が――壁面を蹴る足音が聞こえてきた。ジャックが狼狽する。

モリアーティが刮目する。

そしてコナンが瞠目する前で――

ロープに引かれて壁面を駆け上がった巨体が、兜の立物を月光に輝かせ、ホワイト・タワーの屋上へと躍り出た。

「コナン！」

一瞥して状況を把握したのだろう。

自動機巧人形の背の上で、精一杯身を乗り出しながら、

「大丈夫だ！ 君は、その《ギアス》を押し返せる！」

アーサーが叫んだ。

不思議だった。その叫び声を全身に浴びた瞬間、コナンの中で彼の意識が浮上した。

自分の中のジャックが慌てるのがわかった。逆に、コナンは奮起する。いちいち悩んだり考えようとはしなかった。ただ一心に、ジャックの支配を押し返した。

あのアーサーが言っているのだ。

ならば、自分には、できるはずだ。

「……ア、アーサー……」

動いた。

舌が、唇が、コナンの意志で動く。背後のジャックが息を呑むのがわかった。口に続いて、右手が動く。ナイフを首筋から離れた。押し返す。自刃を命じる悪意を、真っ向から拒絶する。

巨大な巖のようだった手心えが、不意に消失した。解けた。ジャックの《ギアス》が破れたのだ。

その瞬間、コナンは本能的に身体を捻り、右手につかむナイフを振るった。背後で、ジャックが突き出したナイフの切っ先を、横薙ぎに弾き返す。

だが、ジャックは必死の形相で、何度もコナンに斬りかかった。彼の意図はすぐにわかった。コナンと斬り結びながら、彼の「側にいる」ことで、狙撃を逃れようとしているのだ。

「コナン!？」

「大丈夫だ！ 任せる！」

「大口を叩くなよ、ワトソン！」

「黙れ、ジャック！」

ジャックの技量は明らかにコナンを上回る。だが、防御に専念さえすれば、凌ぎ切れない程ではなかった。

何より……まだ残っているのだ。乗り移ったジャックが見せた、己の身体を機械の如くに操る術——その感覚が。

コナンがジャックの猛攻を防いでいると、三度、銃声みたびが跳ねた。

一瞬だけ目を向ける。《ジャック・ザ・ナイトメア》だ。階下から上がってきた隊員が、階段のある尖塔から屋上に出た途端、銃撃を受けて転倒していた。銃声は続く。もう一度。さらに、また。

《ジャック・ザ・ナイトメア》たちは次々銃弾に倒れながら、一切怯まずに屋上に飛び出して来る。そして、銃弾を掻い潜りながら、全速でコナンたちの元へと駆け寄った。

それぞれの手に、ナイフの刃を光らせながら。

ジャックの攻撃を凌ぎながら、彼らにまで注意を割く余裕はない。

しかし、

ガシャッ、

と《ジャック・ザ・ナイトメア》たちを阻み、自動機巧人形オートマタが立ち塞がった。

アーサーだ。

隊員たちのナイフなど玩具に見える、長大な日本刀が月光を跳ね返す。一刀ごとに風を巻き、その巨体を壁にして敵を寄せ付けない。

そして、わずかでも足を止めた者は、冷徹な狙撃手に狙われた。一人、また一人と、《ジャック・ザ・ナイトメア》の仮面が落ちる。

「お、おのれ……おのれっ……」

ジャックの手数がさらに増した。だが、そのナイフの動きからは、次第にキレが失われ始めた。

「諦める！」

とコナンが告げる。

「投降しろ、ジャック！ これ以上仲間を死なせるな！」

「仲間だと？ 捨て駒が思い上がるな！」

ジャックの目が見開かれた。右目に怪しい光が燃え上がり、視線がコナンに突き刺さる。コナンは彼の目を正面から見返した。

もはや恐怖も動揺すらなかった。仮に《ギアス》が自分を縛ろうと、いま、後ろにはアーサ

ーがいる。彼が《ギアス》を破る力をくれる。

コナン・ワトソンが手足たるのは、アーサー・ホームズただ一人。他の者では、断じてない。

「ジャック！」

コナンが身体ごとぶつかるように、ジャックとナイフを斬り結ぶ。

《ギアス》に集中していたジャックが、突き飛ばされて体勢を崩した。

「馬鹿な。なぜ利かない？ お前は一体……まさか、もう……」

唐突にー

ジャックが固まり、一拍おいて口からゴボリと血を吹いた。

よろめきながら、のろのろと背後を向きー

「さらばだ、ジャック。そこが本当に存在するなら、《Cの世界》でまた会おう」

刃元まで濡れた短剣をひと振りし、血を払いながら、モリアーティが告げた。

ジャックが床に倒れる。彼の身体から、血溜まりが広がっていく。

しかし、

「……を……火を！」

血の泡を飛ばしながら、ジャックが絶叫。

そして、息絶えた。

すると、最後まで生き残っていた二人の《ジャック・ザ・ナイトメア》が突然踵を返し、階下に降りる尖塔へと走り出した。

「——不味いっ。撃て！」

モリアーティが北側のウォータールー兵舎に向かって、大きく手を振った。すぐさま銃声が応え、隊員の一人を狙撃。動きを止めた。

だが、最後の一人は尖塔に飛び込んだ。自動機巧人形アウトマタの背中で、「なんだ？」とアーサーが困惑する。他方、コナンは「あっ！」と思い出した。

「不味いぞ、アーサー！ タワーには爆弾がー」

コナンは慌てて後を追おうとした。

しかし、走り出した直後、飛び込んだはずの《ジャック・ザ・ナイトメア》が尖塔の出入り口から吹き飛ばされて戻って来た。

隊員は屋上を転がり、そのまま動かなくなった。

「アーサー！ コナン！」

「お二人とも、無事ですか？」

新たに屋上に現れたのは、クラウスと銀助だ。遅ればせながら、彼らもこんな場所にまで駆

けつけてくれたらしい。

「警部。銀助」

安堵の余り、コナンの顔がほころんだ。

しかし、

「そこから出るな！ 狙われるぞ！」

アーサーが警告を発して、コナンを狙撃から守る位置へ移動した。コナンもすぐに緊張を取り戻す。

まだ「敵」は残っているのだ。

「やれやれ。最後は君たちに助けられるとは、なんとも格好が付かないな」

そう言っつて、モリアーティは肩を竦めながら短剣を鞘に戻した。

対するコナンは、もう一度ナイフの柄を握り締める。

モリアーティは兄を殺したと明言した。

いま、兄の仇が目の前にいるのだ。

「……落ち着けよ、コナン。少し前から狙撃手が二人に増えている。《シユタイン》^こだけじゃ、防ぎ切れない」

仇を討ちたい衝動はあつたが、アーサーの指摘に頷くだけの冷静さは残っていた。

自分だけなら、後先考えずに斬りかかっていたかもしれない。

だが、自分を助けに駆けつけてくれた仲間たちまで巻き込む真似はできなかった。

モリアーティは短剣を鞘に収めた。それはつまり、ここでこれ以上争う気はないという意味表示だろう。コナンはゆっくりと、ナイフを持つ手を下ろした。

「――仇が打ちたいかね？」

モリアーティが尋ねた。

からかっているのか、とコナンはモリアーティをにらみつける。「馬鹿っ、コナン！」とアーサーが肩越しに注意したのは、おそらくモリアーティと視線が合っているからだろう。

ジャックに次いで、今度はモリアーティから《ギアス》を掛けられたのでは笑うに笑えない。

だが、モリアーティの真意が知りたかったのだ。兄を殺した理由と、それをあつさり開かした意味を。

彼が言った、「そのときが来た」とはどういう意味なのか。

兄が「始めから死ぬ定め」とは、一体どうしてなのか。

しかし、コナンの眼力では、モリアーティの瞳から謎を読み解くことはできなかった。

「仇が討ちたいなら、いつでも来るといい。私はこれからも、この街^{ロンドン}にいる。ただ、個人的な意見を言わせてもらおうとー」

「……なんだ？」

「破滅と引き換えの復讐が、本当に君の『欲望』なのかね？ 自らの奥深くに、真摯に問いかけてみるといい。君の、真の『願望』が何か」

「……………」

コナンは無言で答えない。モリアーティもまた、返答は求めていないのだろう。それだけを告げるとコナンに背中を向け、反対側の尖塔へと歩き始めた。

去りゆくモリアーティを、コナンは黙って見つめ続ける。

ところが、今度は相棒が黙っていなかった。

「待て、モリアーティ！ ここにはどうやって登って来た？」

それだけは確認せねば気が済まないと言わんばかりに、アーサーが問いかけた。

モリアーティの足が止まり、彼は楽しげに振り返る。

「君の推理は、名探偵？」

「僕が『ジャック』たちを引きつけている間に反対側から登った」

「外れ。ジャックはロンドン塔全域をカバーできるような見張りを配置していた。実行部隊だけ引きつけたところで、意味はない。ただ、結果的に君の活躍は、こちらにも有利に働いたがね」

「なら、正解はっ？」

「芸のないネタばらしで恐縮だが、静音エンジンはちょっとしたものだろう？ 亡き同志、ピッチャードが戯れに作った作品だ。この際ひとつ忠告するけど、君の発明は、エレガントさに欠ける」

「……エンジン？」

モリアーティはもったいぶった仕草で腕を振ると、人差し指を伸ばし、さっと頭上を指さした。た。

その瞬間、月が雲に隠れたのか、屋上が薄暗くなった。まるでモリアーティを目撃したときのようなのだ。

だが、違う。雲ではない。コナンは啞然と口を開けて頭上を見上げた。

「なっ……これは……飛行船！？」

アーサーが驚愕して叫んだ。

ホワイト・タワーの上に、どこからか漆黒の飛行船が滑り込んできた。

まるで空飛ぶ鯨のようだ。それぐらい現実感がない。頭上に巨大な物体が浮かんでいるというのに、その重量も感じさせなければ、まったくの無音なのである。しかも漆黒に塗られた船体は、次の瞬間にも夜の闇に溶け込んでしまいそうだ。

「悪いが、後始末を任せるよ」

そう言って、モリアーティは頭上を指した腕を、今度は真横に伸ばす。その腕目がけ、胸壁の向こうから、空から垂れる縄ばしごが迫った。

モリアーティが縄ばしごをつかむと、飛行船は急激に浮上。モリアーティの身体が、たちまち宙に飛び去って行った。

残されたコナンとアーサーは、まだ啞然と口を開けたまま、遠ざかる飛行船を仲良く見送った。

青白い月明かりが、ホワイト・タワーの屋上を照らしている。

「……何が『芸のない』だ。女装といい、あの男、実は相当目立ちたがり屋だぞ」

アーサーの率直な感想に、コナンは同意して頷いた。そして、いよいよわからなくなった。

あの男が兄を殺した。本人が告白しているにもかかわらず、どうしてもその事実がしっくりと来なくなったのだ。

だが、焦ることはない。彼の言い方を借りるなら、いまはまだ「そのとき」ではなかった。それだけのことだろう。

「……この街ロンドンにいる？ いいだろう」

いつか必ず、捕まえて、真相を聞き出してやる。コナンはそう、胸に誓った。

それは間違いなく、彼の「願望」のひとつだった。

*